



洋書輸入協会会報

Vol. 26 No. 8 (通巻303号) 1992年8月

『ABA コンベンション1992』

昨年の湾岸戦争以来の不景気感が払拭できずにいるばかりか、ひと月前のロサンゼルスにおける米国史上最悪の暴動の衝撃が記憶に生々しく残るなかで、ディズニーランドで知られるロサンゼルス南部のアナハイム市に集まった人々の多くは、僅かながらも、将来に希望をもって帰路についたようだ。

昨年ニューヨークで開かれた ABA コンベンションは 36000 人の入場者を集め史上最大となったが、今年のアナハイムも決して捨てたものではなかった。予想されていた 26000 人の入場者を上回る 27516 人の入場者に恵まれ、4 セクションに別れた広大な会場には、年に一度の祭りの熱気が確かにあった。なるほど今年の ABA は華々しいショーと言うよりも堅実でビジネス色がやや濃厚だったかもしれないが、悲観色で染りがちな昨今、ビジネスに直結するこのような大きな催しが必要だったのだ。もちろん期待どおりの成果が得られず落胆した参加者もあるだろうが、それでも同業者やさまざまな分野の人々の情報交換や専門家による数多くの講義を通して貴重なものは得たはずだ。

5月22日(金)からコンファレンスや専門家によるレクチャーのプログラムが始まり、翌23日(土)からメインのトレード・ショーが開幕した。今年のテーマはディズ

ニーランドのあるアナハイムにふさわしく児童書であった。これには米国の有識者間では初・中等教育の現状に対する危機感の高まりがあり、マスコミもしばしば学童の学力低下に警鐘を鳴らしているという背景がある。しかしながら中心会場の一部(会場全体の約1/12~1/13程度)に児童書のセクションが設けられてテーマをアピールしてはいたが、参加者の大多数にとっては特に関心を引くものではなかったように見えた。児童書は重要でしかも着実に売れるものかもしれないが、年に一度の全米規模の大きなショーの参加者にとって注目すべきものは他にあったということだろう。常にベストセラーを出しているような著名な出版社のブースには人が溢れ喧騒に包まれているのに対して、児童書セクションはゆっくりと選書や商談を進める雰囲気といえぼその様子を想像していただこう。

会期中、コンベンションセンターと2軒のホテルを会場として開かれたコンファレンスや専門家によるレクチャーの多くは、書店経営者のための学校とも言うべき実用的なものである。内容は多岐にわたっているが、いずれも教育色彩が濃く、日本のような取次のバックアップが期待できないアメリカの書店マネージャーにとって貴重なものになっている。会期中一人でそのすべてを聞

ABAコンベンション1992.....1	洋書は航空便で輸入を原則に3	第25回箱根囲碁会の記6
東京税関東京外郵出張所の 人事異動について2	洋書輸入協会史(72)4	計報6
理事会報告3	うちの会社6	東京の坂と橋と文明開化(27)7
	文化厚生委員会だより	広告8

くことはもちろん不可能なので、希望者はカセットテープを購入して後日聞けるようになってきているのは有難い。

ニューメディアの進出は数年前から目につく現象だったが、今年はそれが一層顕著になったようだ。ソニーのデータ・ディスクマンがアメリカで販売開始されたのが昨年の暮れだった。出版社側のソフトの開発も想像以上に急ピッチで進められているようだし、The Voyager Company というニューメディア出版社が行っていたマッキントッシュ・コンピュータを使つてのエレクトロ

ニック・ブックのデモンストレーションはかなりの関心を引いていた。いずれも直ちに書店の商売になるものではないだけに現時点では単なる好奇心の域を出ないかも知れないが、The Voyager がマッキントッシュ用に開発した CD-ROM やレーザー・ディスクをベースにした一連のニューメディア商品は教育や娯楽における新しい出版時代の到来が本物であることを感じさせるのに十分の出来栄えと見えた。

来年はフロリダ州のマイアミが会場となり、より一層の成功が期待されている。（紀伊國屋書店 加川）

東京税関東京外郵出張所の人事異動について

平成4年7月1日付にて、東京税関東京外郵出張所の人事異動が行われました。現在、所長以下担当係官及び事務分担は以下の通りになっています。

所長 弘井得二郎 次長 野呂 健治	総務課	出張所の事務の総合的企画及び運営	
	課長	竹内 毅	
	輸出通関部門	輸出郵便物の通関事務	
	統括審査官	高畑 利弘	戻し税または還付金関係事務
	輸入総括部門	外為法関係事務、証明書交付事務	
		輸入通関事務の調整、評価関係事務	
	統括審査官	堀内 格	収納、還付金関係事務
	特別審査官	無体財産権及びワシントン条約関係事務	
	受理審査部門	小島 四郎	特惠管理及び税表分類
		外為法関係事務	
	統括審査官	原 幸行	輸入郵便物の受付事務
	輸入通関第1部門	保税運送の承認、証明書交付事務	
		ブック通関事務	
	統括審査官	阿部 勇	輸入郵便物の通関事務（船便、航空便）
	輸入通関第2部門	同上	
	統括審査官	岡 弘	
	輸入通関第3部門	同上	
	統括審査官	浮田 芳照	
	輸入通関第4部門	同上	
	統括審査官	待井 武伸	
	輸入通関第5部門	同上	
	統括審査官	三上 晴夫	
	輸入通関第6部門	同上	
	統括審査官	室井 友幸	
	輸入通関第7部門	同上	
	統括審査官	木村 英一	
	輸入通関第8部門	同上	
	統括審査官	宮尾 清美	
	税関相談官	通関相談、苦情処理	
		通関指導と税関業務の広報関連事務	
		大島 良吉	
		豊見山文雄	
		坂口 弘	

理事会報告

6月8日(月)

(一) 規約改訂委員会

協会規約および役員選出規定改訂の件は、規約改訂特別委員会（仮称）で審議することとし、委員会編成の具体化を、他の委員会の編成替えと併せて総務委員会で検討することにした。

(二) 日米大学図書館会議

会員各社に対し協力方要請していた第5回日米大学図書館会議への寄付金募集につき、各社よりの応募状況が報告された。

(三) その他

6月26日(金)

(一) 5月分収支計算・予算対比表

6月12日(金)総務委員会での検討にもとづく高橋絃氏（丸善）の報告を承認した。

(二) 委員会編成替え・特別委員会設置

総務委員会の委員会再編案を審議し、新委員会の構成を決定、各委員会および特別委員会の委員長、副委員長を互選し、次の理事会で確定したうえで各委員会の委員を選任することにした。

(三) その他

(投稿)

「洋書は航空便で輸入」を原則に

三晃図書貿易株式会社 三宅 瑋 宏

本誌4月号にビューロー・ホソヤの細谷さんがお書きになったものを読ませていただきました。細谷さんは航空便を利用せざるを得なくなった結果の運賃増額分が、またまた小売店の負担になることにご同情下されお書き下さったものと感謝いたしております。しかし、考え方の方向としてはやはり逆向きではないかと思うのです。

わたくしがこの業界に入りましたのは、まだ戦後は終らない時代でした。それからすべての分野に高度成長時代があり、また空港周辺の騒音問題が大きな社会問題にもなる時代になりましたが、洋書だけはそんなことに関係なく、いまでは数も少なくなった貨物船で送られてくる状態がずっと原則的には続いています。

フランス政府の意図はわかりませんが、自国語と文化所産に誇りを持つ国として、この時代に書籍を貨物船に

のせるのは看過できない気持ちも理由としてあったのではないのでしょうか。

なぜ今まで洋書の輸入が原則的には船便で行われることが続いたのでしょうか。われわれ関西人が上京するのは新幹線です。料金が高いと文句を言いながらもそれなりに納得し便利さを享受しています。国鉄が新幹線を開発したのは、利用者の便宜を図ることに責任をもつ立場にある業者として、将来を考えた施策だったと思います。しかるに洋書業界では利用者、特に大手利用者が、云ってみれば在来線の団体割引料金程度しか払ってくれないことを解決不可能な障害と受取り、業者としての責任ある立場にありながら利用者の理解を得る努力を怠り、ながながと戦後を引きずってきたのではないのでしょうか。

利用者の、より速くへの要望はずっと以前からのことで、いまでは費用小売店負担のエア・フレートその他の航空便利用が部分的に行われています。この中途半端な処理が小売店を圧迫しているのも困ったことですが現状です。この際「すべての洋書は航空便で輸入される」を原則とすることを前向きに考えてはいかがでしょうか。

数名の利用者のご意見では原則的に賛成です。選択肢として船便も残してはのご意見もありますが、フランス政府の送料援助付をもとに戻すのはやはり考え方として逆向きではないかとの意見です。

勿論問題はフランス書だけではありません。この機会に各国政府に陳情書を出し、洋書の航空便利用にともなう費用にフランス政府同様援助策を実施してもらうよう働きかけるべきです。

航空便利用にともなう費用はリーズナブルな金額で利用者に負担して頂くのは当然です。この合意形成を図ることは現状では容易でないでしょうが、あらゆる点で遅れている業界を世間並みにするためには、いずれは乗り越えねばならない課題と考えます。

全ての洋書の輸入が航空便利用になった場合のメリットは利用者・業者の双方にとり量り知れないものがあると予想されます。各社において営業、仕入、経理担当者具体的なメリットを予測してもらって下さい。沈殿した業界に新時代をもたらす一助になるかも知れません。

(1992. 5. 18)

(本年4月号に掲載のビューロー・ホソヤ・細谷さんの投稿“フランス郵政大臣へ嘆願書出される！”に関する御意見です。さらに多くの方から活発な御意見をいただければ幸いです。——会報委——)

洋書輸入協会史 (72)

洋書輸入協会顧問 相良 廣明

79 返品とクレジットの問題 (前号よりの続き)

昭和35 (1960) 年8月、海外出版社への返品などの諸要因によって生ずるクレジットの処理に、不備があると通産省より指摘を受けた件につき、業界としては対策小委員会を設け、対策を練った上で、11月8日に「返品とクレジットについて」と題した要望書を通産省に提出した。

79.5 返品とクレジットの手続き改正作業進む

この要望書提出時だけでなく、小委員会は提出後も通産省と折衝を続け、12月9日の協会懇談会の席上で報告出来るところまで漕ぎつけた。その内容は昭和35 (1960) 年12月13日付JBIA No. 117で次のように会員に知らされている。

記

懇談会の報告

(1) 返品クレジットの件

予て (かねて) この問題について委員会を設け研究しておりましたが、本会として成案を得ましたので、11月8日通産省と事前折衝を行いました。

現行の為替管理が行われている限り、書籍だけに一切の手続きを不要とすることは出来ないとの見地から、標準外決済 (大蔵省の事前同意を要す) のいらない、通産省と税関だけで済むような手続きの簡素化について下記の通り意見の一致を見ました。

A 返品 総額\$500まで輸出手续をすることなく、返送する書籍の数量、価額、書名、送り先等を記載したリストを税関に提出し、認印をして返して貰う。(無為替輸出許可の効力を持つ)

B 外貨債権回収免除の許可 総額\$500までは、クレジットの金額を記載した返事と共に、前記税関認印あるリストを添付して一括申請することが出来る。

(返品金額とクレジット金額の相違も認める)

C 無為替輸入 上記回収免除のあるクレジットに対し、\$500まで無為替輸入を税関において認める。

大体以上の通りで、これが決定発表されるまでは現行の黙認を継続することになりました。其の後12月7日通

産省担当官から、大体省内の賛成を得たので、税関へ提出するリストのフォームを考えているから、原稿が出来たら相談したいとの通知がありました。従ってスタンディングオーダーの残本、落丁、誤着などの返品等も、この方法で簡易に処理されることになりそうです。(以下略)

更に12月14日には、通産省より検印用返品リストのフォームが出来たからという連絡があり、早速丸善、紀伊國屋、海外出版の三社で通産省に赴き、詳細を打ち合せた。その結果を12月16日付で、「返品とクレジットの処理について、改正手続の概要」と題して取りまとめ、協会メンバーへ知らせている。そして翌昭和36 (1961) 年1月4日から実施という見通しまで得られている。

しかし順調であったのはここまでで、年末ぎりぎりに通産省から呼び出され、種々検討の結果、改正の要点であった無為替輸出の手続きをやらないものとして話を進めて来たものが、法規上廃止する訳にはいかないことが判明した。そこで\$500以下のみを無為替輸出手続き省略ということで再検討しているという話であった。以後省側の誠意と努力は見えていても、改正手続の実施はこのあたりから遅々として進まなくなってしまっている。

79.6 その後の返品とクレジットの問題

昭和36 (1961) 年の2月に入ると、今度は通産省の輸出課より、輸入課との打ち合わせの上で協会と話し合いたいという要望があった。輸出課としては、この4月から貿易自由化の一環として輸出手続きを大幅緩和したいという議論が出ており、返品とクレジットは輸出と関連があるためである。このため、協会からは前記の三社が代表として通産省に赴き、輸出課と懇談し現状を説明、協会としての希望を述べている。

その後、理事会と対策小委員会とで、これまでの全経過を通じた見通しをまとめた。即ち、現段階では\$500以下にせよ\$1,000以下にせよ、管理を撤廃するということが官庁側が踏み切るのは、やはり時期尚早であろうし、困難なことであろう。しかし、管理を撤廃する以外に書籍・雑誌の細い金額の返品とクレジットを処理する規則

を、それも輸入と輸出に跨って作るということは極めて困難なことであろう。ところが、時代は貿易自由化の方向へ確実に向かっているので、今回の「返品とクレジット問題」の顕在化を契機とした官庁側との、累次の話し合いによって得られたと思われる理解と黙認をよすがとして、管理撤廃の時期到来までの間は目立たぬよう潜行する以外はあるまい、というところが結論となっている。

同年5月の協会総会では、返品とクレジットの件はなお通産省で検討中と報告されている。更に昭和38(1963)年には、大手の二社が船便で返本しようとしたのがひっかかり、3月13日に今度は通産省だけでなく大蔵省まで加わって理事会の釈明を求められた。この時には先回の話し合いより既に二年半を経過しており、先方の係官もほとんど交代していたので、改めて昭和35年に提出した要望書を提出し、説明を行った。結果的には大体前回と同じように理解が得られ、現状を続けることも止むなしという線に落ちついた。

他のことでも同じであるが、官庁の規則は、すべてを網羅する訳には行かず、細かすぎると規則のための規則になって運営がうまくいなくなる。しかし建前というものがある、問題が起きると取り上げざるを得ない。また係官が交代すると問題が蒸し返されるということがどうしても起きる。返品とクレジットの問題はこの一つの例であり、協会側としても、この問題については、管理撤廃の時期が来るまで、必要とあれば何度でも説明を繰り返し、一方では船便で返すなどの目立つようなことは避けようではないかというのが、このときの雰囲気であった。

80 諸展示会

昭和35(1960)年度から36(1961)年度にかけて、諸展示会が活発に企画され実施された。

80.1 スイス書展

昭和35(1960)年6月1日の理事会で、丸善よりスイス出版社の代表アインゼル氏及びスイス大使館のボネル氏と会った模様が報告された。即ち、スイス出版協会は、スイス政府と日本外務省後援のもとに、洋書輸入協会と共催でスイス書展を開催したいと考えている、展示図書は約1,000点、会場は著名百貨店、東京だけではなく他の大都市でも開催したい、というものであり、理事一同も

賛成、このときからスイス書展の準備が始まった。

同年12月13日付、JBIA No.117では「スイス書展の件」として、次のように会員に知らせている。

記

6月10日の懇談会でお話申上げましたスイス書展の件につき、スイス大使館 Frits Bohnert 氏及びスイス展代表 Ernest Scheidegger 氏の来訪を受け、下記の通り変更になる旨の通知を受けました。

イ 東京高島屋で開催予定のところ未だ契約出来ず、止むなく三越の岡田氏と話し合った結果、書籍だけの展覧会はあまり歓迎しないが、来年5月12日頃ならやっても良い。

ロ 展覧会は純粹に書籍を主とするが、周囲に写真によるデザインで、スイスの風物も紹介する。(以下略)

スイス書籍はこのようにして、逐次準備が進められ、結局昭和36(1961)年5月9日から14日まで、三越本店で開催され、次いで大阪ではそごう、京都では富士大丸など各地で開催され好評であった。なお前出の岡田氏とは、多分あの岡田氏のことであろう。

80.2 プレス・フランセーズ展

昭和35(1960)年11月7日の朝日新聞に、プレス・フランセーズ展を11月8日から13日まで、日本橋三越にて開催する、フランスで発行されている雑誌・新聞1,200種類を中心に展示する、主催 フランス定期刊行物編集輸出業組合、朝日新聞社、後援 フランス外務省、情報省、日本外務省、文部省という記事が掲載された。直前に、三越より洋書輸入協会に電話がかかり、若干の説明があった。

この件で早速理事会が開かれたが、新聞記事に洋書輸入協会の名前がないことでも明らかなように、この件ではどうも協会に話が来ていなかったようである。一方でサンディカ(フランスの雑誌輸出業組合)のモティエト氏が来日して活動している由。この理事会に来日中のHachetteのドッドマン氏と、ル・ジャルゲン氏が出席し、協会が知らなかったことに仰天、種々の提案がなされたが、結局この企画は三越の宣伝部がかかわったために、洋書輸入協会員(当時)の三越図書仕入部も全く知らず、サンディカの独走となってしまった模様。いろいろなことが起きるものである。

(続く)

“特色ある洋書店をめざして”

株式会社 旭屋書店

旭屋書店は1949年6月、大阪駅前創業以来、約半世紀の間、地元大阪のみならず、東京、九州、北海道に出店し、また米国、香港の海外にも進出し、皆様の暖かいご支援により発展してまいりました。

洋書に関しては、海外出版物の学術的、文化的寄与を目的として、1950年に業務を開始致しました。以来、主要店舗における店頭販売と外商部での仕入、販売業務を行っております。

主要店舗では雑誌、ペーパーバック、辞書、語学書、小説、絵本、コンピューターの専門書などの洋書を販売しております。

一方、外商部は、1950年の開業以来近畿一円及びその周辺の大学、研究所、民間企業を主なマーケットとしており、洋書の専門書はもとより、雑誌、テキスト

販売、古書、コレクションの販売、ビデオなど取り扱う商品は多種多様であります。

しかしながら、多種多様な商品を扱うということは反面、どの分野も専門的でないというジレンマを持つこととなります。とりわけ、外壳部門では過去の実績を踏まえて社会科学関係、すなわち経済、法律、社会学などの分野の拡大充実に推進しております。

現在の洋書業界を取り巻く環境は、雑誌部門の外資系の参入、値引率の高騰、就学人口の減少傾向など極めて厳しいものがありますが、このような特色作りによって顧客から信頼感をえることができ、また同時に業界発展のためにも寄与できるものと確信しております。

文化厚生委員会だより

第25回箱根碁会の記

7月11日～12日、囲碁同好会恒例の箱根一泊囲碁会を開きました。今年は第25回の記念すべき回になりましたが、残念ながら常連の東光堂 石内会長、洋販 渡辺会長の2長老、また、当囲碁同好会の実力者、テクニコン 楯氏、中央洋書 前橋氏のお二人もそれぞれご都合がわるくご欠席となったのは少々寂しく残念でしたが、碁は打たないが後の麻雀が楽しみと昨年から特別参加のミロブック 堀井氏、囲碁同好会発足当初の名幹事、洋販 柴山(康)氏のひさしぶりの参加もあり総勢16名で各4回碁盤を囲み、四戦全勝で医学書院 MYW の荒木氏が優勝、2位 洋販 長島氏、3位 洋販 柴山氏、4位 極東書店 内藤氏、5位 教文館 倉持氏でした。それぞれ、賞品と俳人でもある石毛八段の直筆の色紙、扇子を獲得されました。ミロブックの堀井氏には特別参加賞として石毛先生の色紙を贈りました。我々がミロブックの前社長 鈴木氏の訃報を耳にしたのも、この箱根における囲

碁会の席上であったことを思い出したことでした。

(洋販 武田記)

訃 報

日本洋書販売配給株式会社 取締役相談役・前副社長 栗原光輝氏は、7月2日脳梗塞のため急逝された。享年69歳。御家族・近親者による告別式は7月4日横浜本牧教会で行われた。また社葬は7月21日千日谷会堂に於て柿沼慎牧師の司式により厳粛にとり行われ協会員多数が参列、お別れの花をささげた。

本会報の、7月号には栗原氏の筆になる6月の懇親旅行のレポートが掲載されているが、いくつか頂いた原稿のこれが最後のものとなった。

築地と洋学〔5〕 幕末・明治外国語辞書の歩み(1) 蘭語辞書

丸善・本の図書館 鈴木陽二

『解体新書』の製作に関係した甫周は桂川家の4代目で名は国瑞であったが、7代目にも甫周が出て国興と名乗った。彼も蘭方医で將軍家奥医師を務めたが、むしろオランダ語辞書『和蘭字彙』編纂という偉業で不滅の名を残している。日本の近世の学術を支え、近代の飛躍的発展へと道を開いたのはオランダ語であった。日本における外国語辞書発達の紹介を試みるその第1回目として、まずオランダ語辞書の歩みを述べてみたい。

日本語とヨーロッパ言語の対訳辞書は1595年(文禄4)にイエズス会宣教師が編纂し、天草で刊行した『羅葡日対訳辞書』が最初であった。次いで、1603-1604年に『日葡辞書』が、やはりイエズス会宣教師の編纂により長崎で上梓された。ポルトガル式ローマ字の日本語3万2千語を見出し語とする優れた辞書で、16-17世紀の日本語を知るためにも欠かせない価値の高い文献だという。

1641年(寛永18)長崎の出島にオランダ商館が開設され、長崎通詞を通して蘭学が広がり興隆していったのであるが、オランダ語の辞書が編纂されたのはずっと遅れて1796年(寛政8)刊行の『波留満和解』(一名『江戸ハルマ』)が初めてであった。以前触れた大槻玄沢の芝蘭堂の塾生で鳥取出身の蘭学者稲村三伯が宇田川玄随(槐園)らの協力で作した蘭和辞書で、公称8万語(実数6万前後)の見出し語を有する本格的なものであった。題簽は“F. HALMA: NEDERDUITS WOORDENBOEK”と表示され日本語はない。この表示に見られるように、この辞書はハルマ辞書と称されて、早くから日本に輸入されていた“Francois Halma: Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen.”(『蘭仏辞典』)の1729年第2版に基づいて編まれたものである。ちなみに、ハルマ(1653-1722)はオランダの書籍商で出版業者であった。

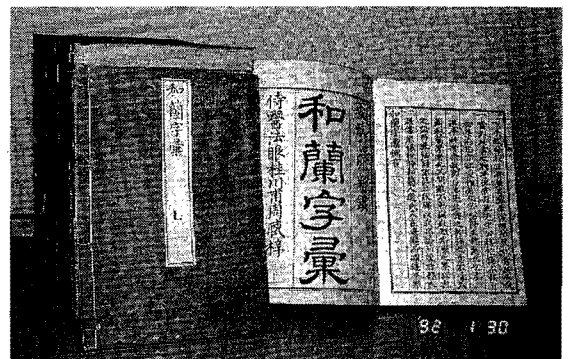
『波留満和解』が刊行されて2年ほどたった1798年(寛政10)に森島忠良(4代目甫周の弟)が初めての和蘭辞書『類聚紅毛語訳』を編纂上梓した。後に『蛮語箋』と改題された有名な辞書で、1,640語の日本語を部門に分けて配列し、オランダ語はカタカナで記されている。その後『波留満和解』の簡略版『訳鍵』(1810=文化7)、中

津藩主奥平昌高による『蘭語訳撰』(1810=文化7)など幾つかの重要なオランダ語辞書の刊行が続く。

1812年(文化9)オランダ商館長ヘンドリック・ツーフ(1777-1835)もハルマ辞書を底本に『ツーフ・ハルマ字書』(一名『長崎ハルマ』)と呼ばれた蘭和辞書の編纂に着手し、彼の帰国後の1833年(天保4)に完成を見る。見出し語約5万、全8冊で11万行という膨大なこの辞書は当時最大・最良の辞書として盛んに転写され、幕末の蘭学者に大いに使われた。『福翁自伝』によると、緒方洪庵の適塾にはツーフ部屋があって「蘭学社会唯一の宝書と崇められ・・・緒方の塾中にもたった一部しかないから、三人も四人もツーフの周囲に寄り合って見ていた」とあり、あちこちから頼まれる写本の作成が塾生にとって結構いい実入りになったということが記されている。勝海舟や西周らも勉強のために複写し、その時2部作って1部を売り、勝海舟などはその売値が彼の1年分の収入に匹敵したということである。

これ程需要が多く高価な辞書であったため復刻の動きも出て、佐久間象山は新たに漢語訳を付け加えた『増訂荷蘭語彙』の刊行を企てたが、幕府によって不許可となる。1855年(安政2)には、7代目桂川甫周(国興)が処罰を覚悟で公刊を願い出たところ以外に許され、弟国幹や柳川春三などの協力のもとに築地の屋敷で開版に着手し、1858年(安政5)に見出し語5万の『和蘭字彙』1880丁(異版あり、全13冊が標準)を完成した。

オランダ語辞書はこの決定版ともいえる『和蘭字彙』を一つの頂点として、またほとんど最後となってこの後洋学は急速に英学の時代に移っていく。

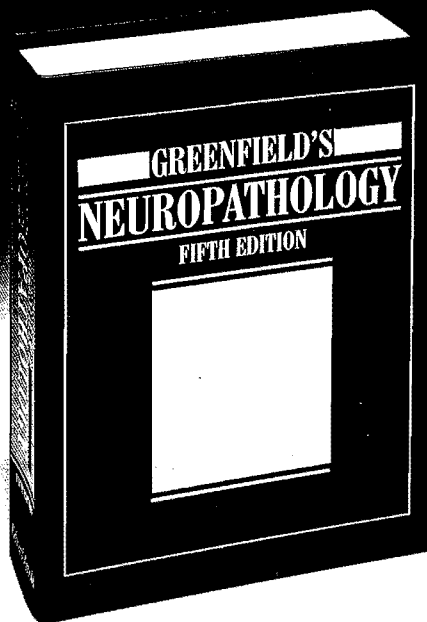


*Announcing a new edition of the leading
reference work of neuropathology*

GREENFIELD'S NEUROPATHOLOGY

FIFTH EDITION

J. HUME ADAMS AND LEO W. DUCHEN



●神経病理学は、記述的学問からダイナミックで進歩的な学問へと変貌しつつある。本書の第4版が出版されて以降、臨床神経科学に関する検査的な内容を扱った文献が激増し、神経伝達物質、脳の損傷、栄養および毒性への解明に大きな進歩がみられた。また、分子遺伝学の発達による新しい影響もあり、AIDSや他の免疫抑制と神経系との関係も飛躍的に知見の増加がみられる分野である。「最近の進歩」の領域から、確立した新たな知識を主要なテキストに盛り込むべき重要な点が急増している。

●この分野で標準的なリファレンスの1つとして好評を博している本書に改訂が望まれていたが、この度大幅な刷新を伴って第5版が出版された。世界的な権威により著された本書は、待望の最先端の専門知識を提供している。高品質の図版、特に電子顕微鏡検査の図版に重点を置きわかりやすく説明しており、この領域の知識を体系的に理解するための座右の著となる。

- 1992 1538pp.,
1,294illus.
- ¥ 48,000 (税抜き)

Edward Arnold
Hodder & Stoughton Publishers

日本総代理店 **nk** (株)南江堂洋書部 〒113 東京都文京区本郷3-42-6 ☎(03)3811-9957

1992年8月 通巻第303号 洋書輸入協会 編集者 柴田 三夫

☎ 103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX.(03) 3271-6920

☎ 530 関西支部 大阪市北区芝田2-1-18 西阪急ビル (旬録書房内) ☎(06) 371-5395